

# 隠口の泊瀬の山は色づきぬ

## 時雨の雨は降りにけらしも

大伴坂上郎女 巻八・二五九三

家を離れての旅の中  
では、見るもの触れる  
もの全てに対して、日  
常よりも豊かな感性で  
接することができるよ  
うに思います。現代の  
旅というと、仕事の出  
張などの他に物見遊山  
としての旅もあります  
が、古代の旅の多くは  
公務や生活のための旅  
でした。本歌も、  
大伴坂上郎女が所領經  
營のために旅をした

「竹田庄」で詠んだ二  
首のうちの一首です。  
大伴氏は、大和国内  
にいくつかの田地を有  
しており、「竹田庄」も  
その一つでした。その  
所在地は、橿原市東竹  
田町や宇陀市高田垣内  
などが候補とされてい  
ます。「竹田庄」で詠  
んだもう一首の歌(一  
五九二番歌)では、稻

やまと  
万葉がたり

刈りをしながら都に思  
いはせていることか  
ら、坂上郎女は「竹田  
庄」の稻刈り作業を監  
督するために、平城京  
から当地へ赴いていた  
と思われる。本歌は、  
そうした望郷の歌を受  
けて、「竹田庄」から見  
える泊瀬の山が美しく  
色付いたことに時雨の  
到来を知るといふ、旅  
先の土地の風物を詠ん

だ歌となっています。月一日ごろとされてお  
その時雨は、晩秋か  
ら初冬にかけて降る雨  
です。1年を24に分け  
た二十四節気をさらに  
区分した七十二候で  
は、「霽時施」という  
候があります。これは、  
現代の時期にするとお  
およそ10月28日から11  
月1日ごろとされてお  
り、ちょうど今ごろに  
降る雨を言います。坂  
上郎女は、泊瀬の山の  
紅葉に、時雨、つまり過  
ぎ行く秋を感じ取った  
ということなのでしょう。  
(粟立万葉文化館研究  
員・吉原啓)

坂上郎女が季節の移  
ろいを知った泊瀬の  
【訳】隠口の泊瀬の山は美しく黄葉した。もう秋  
もすぎようとして時雨の雨が降ったらしいよ。

山。今その中腹にある  
長谷寺は、紅葉の名所  
として有名です。私も  
長谷寺へは何度も旅の  
途次に訪れたことがあ  
ります。長谷寺の寺域  
内には、伊勢参宮に關  
わる道標など色々な石  
造物がありますが、そ  
の中に本歌を刻んだ万  
葉歌碑もあります。晩  
秋の旅、紅葉とともに  
万葉歌を楽しんでみて  
はいかがでしょうか。

員・吉原啓)

原則、隔週掲載

天地と 久しきまでに 万代に

仕へまつらむ 黒酒白酒を

文室智努 卷十九・四二七五

11月23日は新嘗祭の日です。全国の神社では、収穫を感謝する祭礼が行われます。この日は、現在「勤労感謝の日」という国民の祝日にもなっています。が、奈良時代でも新嘗祭の日は、収穫を祝う特別な日でした。本歌は、752(天平勝宝4)年11月25日、宮中で行われた新嘗会の後の宴会で、孝謙天皇が臣下に歌を詠むよう命じ、それに応えた6首のうちの1首です。本歌を詠んだ文室智努(のち文室浄三)に改名は、天武天皇の孫、長親王の子という高貴な生まれであり、以前は智努王の名で呼ばれていました。ところが、本歌を詠む直前の9月、臣籍降下して文室真人の氏姓を与えられます。実は、この臣籍降下には、孝謙天皇の後継

やまと 万葉がたり

者が定まらない政治情勢下で、智努自身に皇位を狙う意思がないことを示し、政争に巻き込まれないようにする目的があったとも言われます。当時のことを記録した歴史書「続日本紀」にも、天平勝宝以後、皇位継承に関わって罪に陥る者が多かったと記されており、智努が臣籍降下し

た当時の緊迫した様子が伝わってきます。そのような政治状況の中で、智努は天皇へ御酒を捧げて、臣下として忠誠を誓う歌を詠んでいるのです。お酒の入る宴席でも気を抜くことの許されなかつた智努の立場がしの

えるとめることになり、その年の10月にできた新酒が捧げられたようです。 視点を現在に戻すと、新酒の季節がやってきています。黒酒・白酒でなくとも、地元の酒蔵や奈良県が奨励している酒米「露葉風」で作られた新酒を、収穫に感謝しながら召し上がってみてはいかがでしょうか。 (県立万葉文化館研究員・吉原啓)

【訳】天地と共に永遠に、万代にお仕えしましょう。黒酒・白酒をささげて。

は、黒酒・白酒は10月上旬の吉日に醸しはじめ、10日以内に終

原則、隔週掲載

経もなく 緯も定めず 少女らが

織れる黄葉に 霜な降りそね

大津皇子 卷八・一五二二

職場である万葉文化館の庭園の紅葉は、例年よりも赤色が濃く、美しい色に染まりました。みなさんは山々が色付く秋の季節を楽しまれたでしょうか。その美しい紅葉の風景を思い出しながら、今回の歌をご覧ください。

子であったと伝えられ、謀反の罪で死を賜った悲劇の皇子としても有名です。大津皇子はこの歌で、秋に色付く色とりどりの黄葉を、少女たちが織り上げる錦にたとえています。その黄葉に霜が降らないで欲しいというのは、霜は黄葉を散らしてしまうものという認識による表現です。一見しても大変美しい風景が思い浮かぶ歌で

やまと 万葉がたり

すが、実は大津皇子は、この歌の内容を思わせる漢詩も残しています。日本最古の漢詩集である「懷風藻」には、「述志」という詩題で「天祗風筆雲鶴を画き、山機霜村葉錦を織る」(詩番六)という皇子の七言詩が収録されています。この詩は、天を紙とし、風を筆として雲の鶴を描き、山を機織りとし、霜を糸通

しとして葉の錦を織る、という内容です。自然をキャンバスに見立てた雄大な詩で、山の彩りを錦を織ることになぞらえる表現は、皇子の万葉歌の風景を連想させます。また、「葉錦を織る」という表現は、当時の知津皇子の詩ではないか【訳】どれを縦糸、どれを横糸ということもなく少女が織り上げた黄葉を、枯れさせる霜よ降るな

と思われるのです。今回の歌とこの詩が同時に作られたのかは不明ですが、同じ作者が、類似する発想の内容を歌と詩に残すということは、古代日本の文学では極めてまれなことです。歌と詩の世界に交流のあったことが推測されると共に、大津皇子の文才が発揮された作品であるといえるでしょう。(県立万葉文化館研究員・大谷歩) 原則、隔週掲載